

INSIDE-OUT

木更津市立木更津第二中学校
〒292-0801 千葉県木更津市請西941番地
☎0438(36)2280 FAX0438(36)2233



木二中 学校だより No.22 令和5年10月10日
校長 山元 竜二

E-mail:kisarazu2-j@kisarazu.ed.jp
https://www.fureai-cloud.jp/kisa-kisarazu2-j

技で人は動かす 心が人を動かす

9月末から10月にかけて、私はこの時期の中学校が大好きです。合唱コンクールに向けた歌唱練習が各クラスで始まり、中学生たちの汚れない歌声が校舎いっぱいに響き渡るからです。

令和5年度木更津第二中学校では、10月26日(木)に文化祭を実施、各クラスから自由曲、BSクラス(BS=Brothers & Sisters)からはBS合唱曲がそれぞれ披露されることになっています。各クラスで合唱責任者・伴奏者・パートリーダー・指揮者を選出し、現在そのリーダーたちを中心に合唱練習が計画通りに行われているところです。

「INSIDE OUT No.7」で「体育祭をはじめ、学校行事には特別な意義がある。」とお伝えしたように、文化祭、とりわけ合唱コンクールにも生徒たちの心を大きく育ませる特別な意義があると私は考えています。

在籍する全校生徒が一人一人お互いの長所・短所を認め合い、尊重し合うこと。そして、その大切さを教職員も含めた全員が共有すること。

INSIDE OUT No.7 より

中学校3年間を通してなぜ合唱に取り組むのだろう。その理由を考えたことはありますか？数十年も昔の話になりますが、私は中学生の頃、合唱が大嫌いでした。今でこそ「カラオケ」が文化として定着し、人前で自らの歌声を披露することに今の中高生たちは何の抵抗もないのかもしれませんが、当然、数十年前は「カラオケ」がそんなに普及していなかったこともあり、私は人前で歌を歌うだなんてそれはもう恥ずかしくて恥ずかしくて、音楽の歌唱テストでは、担当の先生が鬼に見えたほど。

先生：「山元くん、もっと口を大きく開けて歌いなさい。」

私：「(心の中で) …口を大きくって言われても…」

ところが、合唱指導が素晴らしいある音楽教師との出会い、またその指導を受けた中学生たちの歌声によって私の考えが一変。かつての私のように、「歌を歌うのなんて嫌だ。」という生徒だっけってきつというはずなのに「何で無理させてまで合唱に取り組むのだろう…」、中学校の現場に立って間もない頃、そう考えていた私は、彼らの合唱に、その歌声に強い衝撃を受けることに。聴く人の心に響く合唱だったので。

2008年、私の結婚披露宴に当時高校1年生になった彼らが飛び入り参加してくれたのはよかったのですが…、みんな茶髪に金髪、女子のスカートは短く、男子はみんな腰パン。当然、披露宴会場はざわざわとおかしな空気に…。

「先生にあたしたちができることって合唱しかないから、合唱をするためだけに、ここに来ました。」とリーダーの女の子。すると「こんな外見の子たちが合唱だっけ？」という失笑もありました。

唱ってくれたのは「郷愁歌」。彼らが唱い始めた瞬間、雰囲気はガラリと一変します。披露宴会場にいたのは、彼らを初めて見る大人たち。唱い終わる頃には、「この子たちの合唱は何なの？」と多くの大人たちが涙を流して感動していました。これ、本当の話です。

披露宴会場にいた大人たちは、彼らの出で立ち(外見)だけで判断し、色のついた眼鏡で彼らを見ていたのでしょうか。しかし、担任であった私と彼らの関係、仲間同士の人間関係だけでなく、人を思いやる優しいクラスだったのだろうとクラスの雰囲気まで、彼らの歌声から感じとることができたそうです。

まさに心が、魂が震える合唱とは、こういう合唱なんだろうなあと思います。彼らの合唱が上手だったという話ではありません。実際に中学3年時のコンクールでは、最優秀賞を獲ることはできませんでしたから。では何が違うのか。それは、その場を取り繕うような小手先の技だけでは人の心は動かない、感動を届けることはできないということ。人の心に響く合唱を届けようとする姿勢や心があつたということ。

技術的に何か足りないんだけど、一生懸命さだったり、必死さだったり、技術以外の何かが伝わるんだよね…ということがよくあります。例えば幼稚園生たちの合唱。みんな大きな声で必死に歌うあの姿。純粋な心。保護者でなくても微笑ましい、かわいいと感動させられますよね。心が人を動かすとはそういうことだと思ふのです。

注) 中学生の合唱と幼稚園生の合唱を比較しているわけではありません。

合唱曲「Together」の歌詞がぴったりのクラスに

私が勤務した中学校に、こんなクラスもありました。その年のコンクールはどのクラスも合唱がとても上手で、かなりハイレベルでの競い合いでした。私のクラス3年3組の合唱曲は「Together」。責任者、パートリーダーを中心によく練習に取り組んではいました。はじめの頃は、です。しかし、所詮、中学生。練習に取り組む姿勢に段々と温度差が感じられるように。歌声もバラバラ、練習態度もいい加減、リーダーは泣き出す始末で、「心を一つに」だなんて到底言えるものではなくなっていました。3年3組、中学生生活最後の学校行事でクラス崩壊の大ピンチ。そこで終始黙って見守っていた担任の出番です。

「みんな、コンクールが終わったらクラスはどうなると思う？1人1人がもう他人のことなんかかまわられなくなる時がくるんだよ。先生はそれを責めたりはしない。クラスがバラバラになるの、大いに結構。自分の将来に関わる高校受験だもの、バラバラにならない方がおかしい。人のことなんかかまわずに、自分のことだけを考えろって言うさ。でも、クラスがもうすぐそうなるのがわかっている、最後の行事である合唱がこれか？みんな、3年間の中学校生活でこれだけ大きく成長しましたってのがこんなもんか？いい加減な態度で練習してる人に限って理由にならない理由を口にするけどさ、俺ら、歌がうまくなるために合唱してるのか？みんなで合唱好きになりましようってやってるのか？違うでしょ。あのさ、これを最後にこれだけの人数でリズムとメロディと、そして何より指揮者の振り一つでみんなの心を合わせようなんていう経験なんか、この先の人生でありゃあしないよ。ねえ男子、やりたくなさそうな態度でやっている姿を見てるとこっちが恥ずかしくなる。合唱をやるって決まってるんだから、もういい加減に大人になろうよ。どうせやるなら、みんな力合わせてやった方がいいに決まっている。なぜだかわかる？これが最後だからだよ。適当にやったことなんかこの先語り継がれる思い出になんかなりやしない。これだけの人数が必死になれたからそれが思い出になるんじゃないの？みんながバラバラになる前にさ…。」

後にも先にも私が口出しをしたのはその時だけ。その後の彼らの変わり様には目を見張るものがありました。いい加減な態度だった男子も積極的に意見を出し合うまでに。それでも賞を獲得するまでには至らなかったのですが…。

「みんなあれだけ必死になれたんだから、何か賞は獲らせてあげたかったなあ…。うーん…。帰りの会でどうやってみんなを励まそうか…。」と私が教室のドアを開けると、

「先生、賞とれなくてごめんね。はい、みんな唄うよ！」と「Together」を教室で合唱。

「みんな、賞を獲らせてあげられなくてごめんな。」という私の問いかけにみんなの答えは、

「先生、俺ら賞を獲るために合唱してきたわけじゃないよ。」でした。

先生と私たちだけの色褪せることのない共通の思い出を

今から15年前、私はこの木更津第二中学校で3年3組の担任をしていました。その年のコンクールは、3年6組の担任が3年連続で最優秀賞を獲得、もちろん4連覇を狙っていましたが、なんと3組の合唱曲「むぎや」が見事に4連覇を阻止。それはもうクラスの生徒たちは大喜びかと思いきや、33名の頭上にはみんな「？」マークが。

確かに「〇〇先生の4連覇阻止！」を合い言葉に合唱練習に取り組んできました。しかし、市民会館（当時は人数が多くて体育館ではできませんでした。）で発表を終えた生徒たちはみんな口々に「最後にみんなの心が一つになった気がした。」「下手っぴだったけど、持てる力をすべて発揮できた。」「最後の最後が一番の合唱ができた。」「この仲間でこんな合唱ができたんだからもう賞なんかどうでもよくなっちゃった。」と。だからみんな最優秀賞獲得に「？」だったんですね。

3組の「むぎや」は、決して上手だったとは言えない合唱でしたが、責任者を務めた女子リーダーは、クラス発表前の楽曲・クラス紹介で、「合唱は心が大切。先生の心に届く合唱にしてみせます。先生と私たちだけの色褪せない最高の思い出にしてみせます。」と宣言。後にも先にも、私が担任として最優秀賞を獲得できたのはこのクラスだけでした。

合唱が大嫌いだったくせに合唱について熱く語る内容となりましたが、今では合唱は、感動したり、相手を思いやったり、仲間を敬う豊かな心を育む学校教育には欠かせないものであると信じて止みません。

聴く人の心に届く合唱にするためには、リズム、メロディーを合わせるだけではなく、考え方や価値観の異なる仲間たちと合唱を通じて「心」を共鳴させること。人の心を動かすことのできる合唱というのは、そうでなければならぬ、と木二中生に伝えたかった、ただそれだけです。

26日（木）、心に響く、魂が震える木二中生の合唱を本当に、本当に楽しみにしています。